

集落外在住者を民俗芸能の演者として育成する 通い神楽モデルの構築

政策・メディア研究科 修士1年（花巻市地域おこし研究所） 吉田 真彦/Mail:masa0130@sfc.keio.ac.jp

序論

研究目的（リサーチクエスションと仮説）

なぜ、民俗芸能において、集落外在住者が演者として参加する伝承活動が普及しないのか？

ー 現行の演者育成は、集落内や近隣に住むことが前提で、集落外参加者の参入が困難という仮説を検証ー

背景

- ◇多くの民俗芸能では、演者の不足が課題
- ◇在住地を問わず、興味のある者が演者になってくれれば、演者不足の解消に役立つ。
- ◇それには、**持続的に集落に通える仕組み**が必要

↑ 注意すべき点として…

- ・ 集落では、遠隔地（都市部、他市町村）の住民に演者としての役割に対する期待は低い(2006, 澁谷)
- ・ 集落住民の意向を無視した介入は、長期的には住民の負担増や伝承活動の衰退を招く(2006, 澁谷)

民俗芸能における集落内の演者育成

- ・ 対象者は集落内の小学生～高校生
- ・ 希望者を募る、または学校ぐるみの活動とする
- ・ 将来も続けるかどうかは、本人の意思次第

検証すること

集落において、協力意識の高い集落外在住者が参加しやすい演者育成の仕組み（モデル）があると、演者としての参加が促進される。

↑ なぜなら…

- ◇体力的・経済的余裕があり、民俗芸能への親近性を持つ都市住民の協力意識は高い(2006, 澁谷)
- ◇Iターン者や、伝承地外在住者が演者となった事例では、集落外を対象としたPRや神楽体験ツアーを実施

演者確保に関する先行研究レビュー

- ・ 集落の児童・生徒が卒業後に演者となるか否かは、**進学、就職といった外部要因が左右する**(2013, 川野)
- ・ 大出早池峰神楽では、集落外在住者が芸、伝承地住民が祭礼・公演の執行を「**棲み分け**」(2006, 澁谷)
- ・ 岩手大学では、授業での中里七頭舞の体験から、有志が稽古、公演に至る**2段階継承を実践**(2006, 島崎)
- ・ 民俗芸能は、**人々が地域に集い、民俗芸能のために地域へ戻る潜在的機能を持ち、伝承地のコミュニティを維持する機能を併せ持つ**。(2014, 阿部)

調査対象と方法

今後の研究スケジュール

調査対象

大償神楽（岩手県花巻市大迫町内川目大償集落）

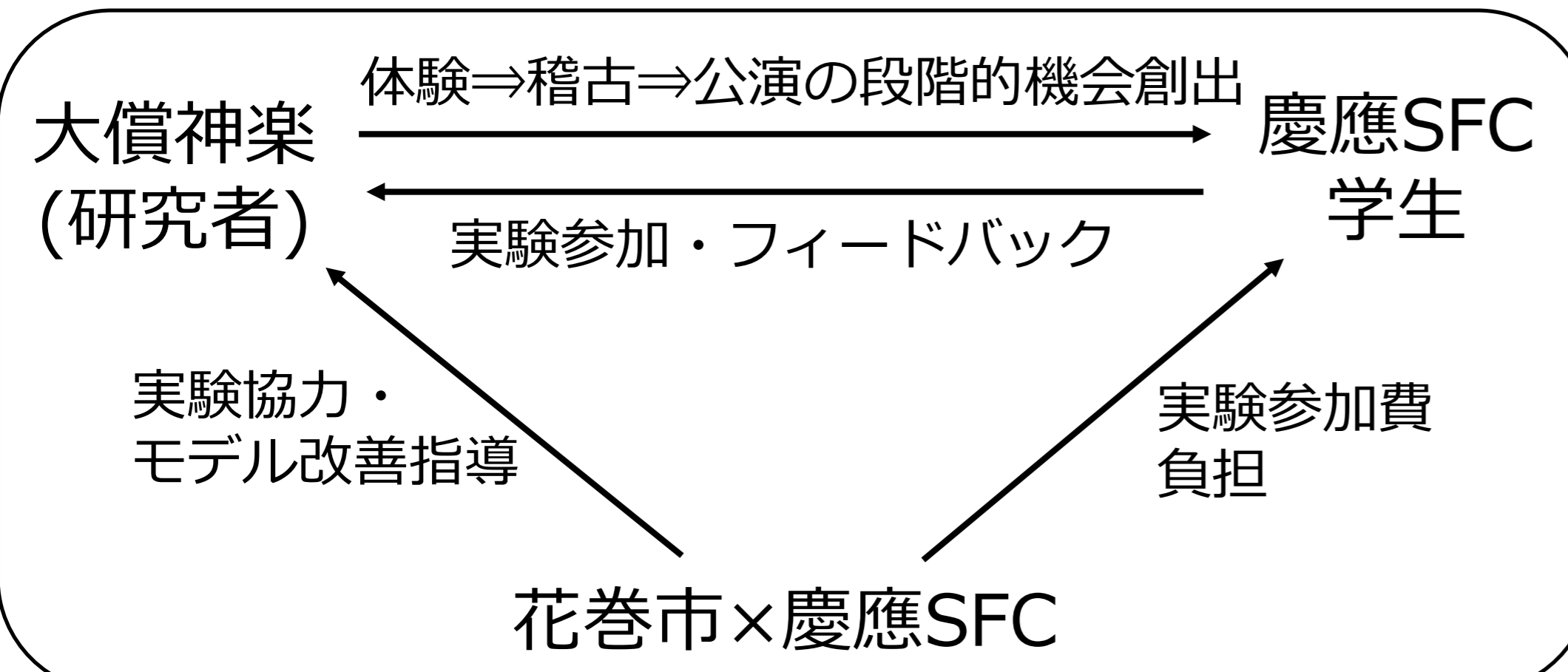
- ◇国重要無形民俗文化財・ユネスコ世界無形文化遺産
- ◇花巻市・岩手県を代表する民俗芸能
- ◇児童・生徒の演者育成を、長期間行ってきた団体
- ◇伝承地外在住者へアプローチする意向を持つ

調査方法

1 通い神楽のプロトタイプ実践を通じた、成立させるために必要な要素の検証

【慶應SFC生を対象とする理由】

- ・ 慶應SFCと花巻市との連携協定による、研究指導や実証実験実施に対するバックアップが可能
- ・ 学内告知やグラスルーツな参加者募集が可能。
- ・ 遠隔稽古に必要な通信環境がキャンパス内にある。



2 1の実験で得たフィードバックを踏まえて改善した「通い神楽」実証実験の再実施

- ・ 通い神楽のプロトタイプ実践
- ・ 実践で観察する変数の整理

体験 ・ 体験前後の民俗芸能に対する意識の変化
・ 今後の祭礼や稽古への参加についての意向

稽古 ・ 対面稽古(月1回)の難易度、習熟度、参加意欲
・ 遠隔稽古(週1回)の難易度、習熟度、参加意欲

公演 ・ 公演出演前後における集落外在住者の神楽への関わり方の意識変化

↑ 相関関係も検証

外的要因 ・ 在住地、年齢、性別、職業、家族構成、年収、民俗芸能の経験の有無…
・ 通える頻度、現地の交通、活動の中で起こった交友状況の変化…

| 月 | 主な予定 |
|-----|----------------------|
| 8月 | 通い神楽衆募集締切(8/19) |
| 9月 | 実証実験開始 |
| ～ | ・ キックオフイベント・体験会 (9月) |
| 12月 | ・ 対面・遠隔稽古 (9月～12月) |
| 1月 | 稽古成果発表会 |
| 2月 | 実証実験結果の検証 |
| 3月 | 改善モデルによる実験準備 |